

松尾

世阿弥作

前

ワキ 官人

シテ 老翁

ツレ 男

後

ワキ 前に同じ

シテ 松尾明神

地は 山城

季は 秋

「四方の山風静かにて。く。梢の秋ぞ久しき。

「そもく是は当今に仕へ奉る臣下なり。さても西山松の尾の明神は。霊神にて御座候へども。朝に隙なき身なれば。いまだ参詣申さず候ふ間。此度君に御暇を申し。唯今松の尾の明神に参詣仕り候。

「嵯峨の山。御幸絶えにし芹川の。く。千代の古道跡ふりて。行方正しき天雲の。大井の入江霧こめて。上は嵐の山風の。声も通ひて松の尾の。神

の宮居に着きにけり。く。

「秋風の。声吹き添へて松の尾の。神さび渡る気色かな。

「有難や和光同塵の斎垣の内には。年を迎へて槃若の真文を講じ。

「又利生方便の社の前には。日を逐うて如在の霊殿を仰ぐ。神明の納受疑ひなく。摂取の願望各成就円満の霊地。今にはじめぬ神拝なれども。まこと

に貴き社内かな。

下歌

「時しも今は長月の。紅葉も四方の気色にて。

上歌

「春見しは。花の都の雲霞。く。立つや日数も移

り来て。今ぞ時なる秋の空。曇らぬ月の都路に。

ゆきゝも繁き諸人の。秋ゆたかなる心かな。く。

ワキ詞

「如何に是なる老人に尋ねべき事の候。

シテ詞

「老人とは此方の事にて候ふか。まづ御姿を見奉れ

ば。此あたりにては見馴れ申さぬ御事なり。都よ

りの御参詣にて御座候ふか。

ワキ

「実によく見てあるものかな。都より始めて当社参

詣の者なり。山の姿神館の面白さに詠め居て候。

当社の御謂委しく申し候へ。

シテ

「さん候此山林は。皆神の御敷地なり。誠に御代千

秋の君が住む。都は間近き神前にて。

ツレ

「むかふ梅津の秋の葉は。河水に浮ぶ綾錦。

シテ詞

「織りかく雲も小倉山。しぐるゝ頃の朝なく。

ワキ 「昨日は薄きもみぢ葉の。

シテ 「今日は濃染の色深き。

ワキ 「西紅の峰つゞき。

シテ 「さながら四方の。

二人 「錦なれども。

地 「松の尾の。山は梢の秋ならで。く。唯時雨のみ

年経るや。霜の後。雪の冬木になるまでも。時知らぬ常盤木の。いく久し神松の。落葉ばかりは塵

の世に。交はる誓ひ頼もしや。く。

地クリ 「それ天は陽を以て徳とし。地は陰を以て用とす。

シテサシ 「然れば神は人天百王の守護神として。

地 「本地寂光の都を出で給ひ。此閻浮提に示現し。五衰の睡りを無上正覚の月に覚まし。

シテ 「国土豊に民厚かれと。

地 「安全を守りおはします。

クセ 「和光同塵は結縁の御はじめ。八相成道は利物の終

りを見する御誓ひ。実に目前にあらたなり。仏は又常住不滅の相を顕はし。有無中道を離れて。人を済度の方便。是れ以て同じ悲願なり。神といひ仏といひ。唯是れ水波の隔てにて。本地垂跡と顕はれ。三世了達の智恵を以て。現当二世までの。

道を照らし給へり。さればにや此社。いづくもといひながら。殊に所も九重の。雲居の西の山の端を。照らすや光りも夕月の。空さえて嵐山の。峰

には実相の声満ちて。聞法の便のみ。大井の波の音までも。常樂我淨の。結縁をなす心なり。

シテ
「梅津桂の色々に。

地
「日も茜さす紫野。北野平野や賀茂貴船。祇園林の

秋の風。稲荷の山のもみぢ葉の。青かりし恵みもさまぐに。誓ひの色はかはれども。此神は分きて世の。月常住の地をしめ。王城を守る神徳の。久しき国に跡垂れて。慈尊三会の暁を。松の尾の

神垣。かはらぬ色ぞ久しき。

ロング地

「実にや誓ひの秋久に。く。代々を守りの御神徳。

猶ゆくすゑぞ頼もしき。

二人

「時しも今日の御神拝。有難しとも木綿四手の。神

の夜神楽めんくに。神をすゝしめ申さん。

地

「さては時しも夜神楽の。声も普き数々に。

二人

「すはや照り添ふ夕月の。

地

「庭燎の光り。

二人

「榊葉を。

地

「うたふ乙女の袖はえて。花の裳裙も色々に。紅葉

をかざし松の尾の。神の告を都人。夜神楽を拝み

給へとよ。く。（中入）

ワキ歌

「実に今とても神の代の。く。誓ひは尽きぬしる

しとて。神と君との御恵み。まことなりけり有難

や。く。

後ジテ

「それ千秋の松が枝には。万歳の緑常盤にて。御代

を守りの御影山。君安全に民栄え。五日の風も枝を鳴らさぬ。松の尾の神とは我事なり。

地 「八乙女の。袖もかざしの玉かづら。

シテ 「かけてぞ祈る玉松の。

地 「光りも散るや露も白縫の。鈴も颯々の。舞の袂は

おもしろや。
(神舞)

ロンギ地 「秋の夜神楽声澄みて。く。神さびわたる深更の。

朱の光りは有難や。

シテ 「庭燎の影も明らけき。榊葉うたふ妙文の。こや松

の尾の神風。ふけ行く秋ぞ惜しまるゝ。

地 「実に惜しむべし惜しむべし。今宵の時も逢ひにあふ。

シテ 「月の光りも照り添ふや。

地 「朱の玉垣。

シテ 「玉の扉。

地 「さし引く袖の露かけて。光りも散るなり小忌衣。

立ち舞ふ花も白妙の。雪をめぐらし千早ふる。神
ぞ久しき松の尾の。おのづから長き夜の。神楽ぞ
めでたかりける。く。

底本…国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈 第五輯』大和田建樹 著